

復活節第7主日礼拝説教「天と地を結ぶ体はひとつ」予稿

石神井教会 2017年5月28日

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 4章1～16節

¹そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、²一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、³平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。⁴体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。⁵主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、⁶すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上であり、すべてのものを通して働き、すべてのもののおられます。

⁷しかし、わたしたち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。⁸そこで、

「高い所に昇るとき、捕らわれ人を連れて行き、人々に賜物を分け与えられた」と言われています。

⁹「昇った」というのですから、低い所、地上に降りておられたのではないでしょう。10この降りて来られた方が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも更に高く昇られたのです。¹¹そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。¹²こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、¹³ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。¹⁴こうして、わたしたちは、もはや未熟な者ではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりすることなく、¹⁵むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面でも、頭であるキリストに向かって成長していきます。¹⁶キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 24章44～53節

⁴⁴イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」⁴⁵そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、⁴⁶言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。』⁴⁷また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、⁴⁸あなたがたはこれらのことの証人となる。⁴⁹わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

⁵⁰イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。⁵¹そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。⁵²彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、⁵³絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

聖書が語られるところで

今日は、キリストのご復活を祝うイースターから数えて七週目の日曜日。主イエスのお約束くださった聖霊の降臨を祝うペンテコステを来週に控えた今日は、主イエスの天に昇られた出来事を記念するように備えられてきました。

主イエスは、十字架で死なれ墓に葬られて三日目にご復活なされ、それから四十日間、弟子たちと共に過ごされた後に天に昇られました（使徒 1:3）。各福音書を見てみますと、ご復活された主イエスは、その間、絶え間なく弟子たちと共にいらしたわけではないようです。そうではなく、弟子たちが集まっているところに、繰り返し、断続的に現れてくださったのです。

そのときの様子は、一様ではありません。しかしながら、弟子たちはそこでご復活された主イエスと出会う経験をしました。実際には、どの福音書も伝えているように、疑う者もいたのです。同じ時間と空間を共有していて、疑う者もいましたが、その出会いを疑わず信じた者もいたのです。そして、ご復活の主との出会いを信じた弟子たちが証言したことには、いくつかの共通点があったようです。まず第一に、そのとき、主イエスは弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と告げてくださったということ。次に、そのときには、主イエスが聖書の物語の説き明かしをしてくださるという経験をしたということ。そして、その主イエスが弟子たちに、聖霊を受けるようにとの約束を告げてくださったということ。それが、ご復活の主と出会った弟子たちの経験したことだったということです。

今日の福音書（ルカ）の伝えるご復活の主イエスは、まず何よりも、聖書の物語を説き明かしてくださるお方です。主イエスが直々に聖書を説き明かしてくださったとは、何ともうらやましい限りです。けれども、弟子たちにとっても、それはいつまでも続いたことではなかったでしょう。ご復活の主イエスは、まもなく天に上げられて、弟子たちの前から引き離されてしまわれたからです。そのときには弟子たちもさぞかし残念がったのではないかと思いきや、福音書の最後の御言葉は、主イエスが彼らのもとを離れて天に上げられると、彼らは大喜びでエルサレムに帰って行った、ということです。

誰かと別れて大喜びするというのは、普通は、一緒に居たくない相手の場合です。もちろん、大人の皆さんは、相手が不快だからといって、別れた途端に露骨に大喜びして見せたりはなさらないでしょう。弟子たちも、立派な大人たちです。そうであれば、弟子たちはなぜ、そのとき大喜びをしたと伝えられているのでしょうか。それは、それが本当には別れではなかったからではないのでしょうか。

弟子たちは、主イエスが天に上げられた後も、自分たちの集まりを続けたのです。そして、主イエスが説き明かしてくださった聖書の物語を繰り返し聞き直したはずですが、主イエスの説き明かしを思い起こしながら、聖書の物語を分かち合ったのです。わたしたちが教会の礼拝や集会でするように、です。そして、そのとき弟子たちは、そこに復活の主が現れてくださるという経験を、なお重ねたのではないのでしょうか。わたしたちも、同じように、聖書の物語を聞き直すたびに、それを説き明かしてくださる主イエスと出会っているのではないのでしょうか。

天に上げられた主イエス

主イエスが天に上げられるという昇天の出来事を、わたしたちは、弟子たちと主イエスの今生の別れの出来事のように見てしまうのです。けれども、この昇天の出来事を、弟子たちや初代教会の信者たちは、別れの出来事として理解し、語ったわけではないのかもしれませんが。むしろ、復活の出来事の完成、というように理解したのかもしれませんが。

主イエスのご復活は、弟子たちがどこにいても、たとえ入口を固く閉じた家の中に籠っていたとしても、彼らの集まっているところの真ん中に主イエスが現れてくださることとして理解され、語り伝えられました。主イエスの昇天は、それがもっと広く、世界大に起こり始めることを告げた出来事として、弟子たちに理解され、語られたのです。

地上の、弟子たちの集まるところにだけ現れてくださっていたご復活の主イエスが、天に上げられることによって、地上の限られたところだけでなく、天においても地においても、あらゆるところで、信じる者のあつまるところにおいでくださるようになった。弟子たちが皆で集まっているところだけでなく、これから弟子たちが出かけて行って、他の人たちの中に入って行って、主イエスの説き明かしてくださったとおりに聖書の物語を分かち合うときに、主イエスが告げてくださった「あなたがたに平和があるように」という平和の挨拶を互いに交し合う者たちの間で、「聖霊を受けよ」という主の約束を信じて集まる交わりのただ中に、主イエスはおいでくださっている。

それが、まもなく聖霊降臨の出来事を経験することになった弟子たちが、その後、世界中に出て行って教会を次々に建てていく中で、いつも信じ、確かめていたことだったのではないのでしょうか。

エフェソの教会に宛てた手紙を記した使徒パウロは、生前の主イエスを知らなかったのです。当時は、現代のように故人の遺影が残されてるわけではありませんでしたから、パウロは、たとえ復活の主イエスが生前のお姿で現れてくださっても、それが主イエスだとは見た目では分からなかったはずです。けれども、パウロは、ダマスコの町にキリスト者を迫害しに行こうと向かっていた途上で幻を見せられたとき、そこに現れたのが主イエスだと分かったといいます。その出会いを導いたのは、誰だろう、パウロが迫害しようとして近づいていた弟子たちキリスト者だったのでしょ。いずれにしても、弟子たちの集まり、教会に触れた者が、そこで復活の主イエスとお会いする経験をするということがあったし、それは今に続くまで教会で起こっていること、皆さんが経験なさっていることです。

この手紙で、そのパウロは、主イエスのことを、「キリストの体」という言葉で、「教会」そのものとしてイメージしています。しかも、それは、天と地を結ぶほどの宇宙大の大きな存在である「キリストの体」です(1:22~23)。天に上げられた主イエスは、どこか天の囲いの中に閉じ込められたのではないのです。天に上げられたお方は、天から地上のどこにでも、いつでも自由に、御父の自由な御心をもって、おいでになられる。おいでくださるのです。

天と地をつなぐ《祝福》を受け継ごう

自分たちのもともと離れられ、天へと上げられていく主イエスの御姿を見た弟子たちは、だからこそ、大喜びしたのでしょう。地上を自分たちと共に歩んでくださった主イエスが、天の御父のもとにおいでになられたのです。地上と天とを繋いでくださったのです。主イエスは、ご自分ひとりで天の御父のもとに行ってしまうたのではないのです。天と地とを結ぶ存在として、天の御父にも、地上の人間にも、ご自身を献げてくださったのです（51 節「上げられた」という語は、「献上した／献げた」とも訳される語です）。

そのような存在となってくくださった主イエスと弟子たちとの関係を、ルカ福音書は、とても象徴的な所作の描写をもって、わたしたちに示してくれています。

主イエスは、そのとき「手を上げて祝福された」のです。そして、「祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた」のです。主イエスは、ご自分の弟子たちを祝福し続ける存在として、天に上げられたのです。ということは、天に上げられて、いつでもどこでも現れてくださる存在となった主イエスは、今も、祝福し続けてくださっている、ということです。

礼拝では、終わりに必ず「祝祷」があります。最近では、多くの教会が「祝祷」という用語を使わず、「祝福」という用語に変更しています。礼拝の終わりに、牧師が祝福を告げているのです。そのとき、多くの皆さんは目を閉じて顔を伏せているようですが、最近では、「目を開けて、祝福する者の顔を見るように」と指導している教会も多いのです。元来、聖書で言われる「祝福」は、何か魔術的な祈願をしているわけではなく、お互いに顔と顔を向き合わせる関係の中で成り立つものだからです。そうは言っても、皆さんは、すぐにそのようにはいられないかもしれません。以前、あるところで、「祝祷で目を開けて牧師を見ていると、神の祝福のありがたさがなくなってしまうから…」という意見を聞いたことがあります。確かに、牧師が告げる祝福は、牧師自身の祝福というよりも、神の祝福なのです。何よりも、主イエスが祝福してくださることを思い起こしながら、皆さんを代表して牧師が祝福の言葉を告げているのです。

けれども、ルカ福音書は、天に上げられる主イエスが弟子たちを祝福してくださった場面で、もう一つの祝福する者をも描いているのです。弟子たちです。「神をほめたたえていた」の「ほめたたえる」と訳されている語は、「祝福する」と同じ語なのです。確かに、主イエスは、弟子たちを天から祝福して下さり、弟子たちが「神をほめたたえ」「祝福する」ことができるようにしてくださったのです。「悪口を言う者に祝福を祈り」（6:28）なさいとお教えくださったのは、主イエスでした。使徒ペトロは、「祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです」（I ペト 3:9）と教えました。

そうであれば、わたしたちは、主の祝福にあずかる者として、互いに祝福を告げ合ったらよいのです。臆することなく、互いの祝福を受け合ったらよいのです。主の祝福を信じ、互いに祝福し合うところで、主は、天と地を結び合わせる存在として、わたしたちをひとつ体に造り上げてくださることでしょう。